はじめに

二〇二二年二月二四日。

ロシアがウクライナに軍事侵攻を開始。

その後、まもなく、ウクライナでは「聖ジャベリン」と呼ばれる現象が起こりました。アメリカ製の対戦車ミサイル「ジャベリン」を抱いた聖母マリアのイメージが、アート作品となってウクライナに登場。武器を手にウクライナを守る聖母マリアの姿は人々の心をとらえ、ウクライナの守護の聖人「聖ジャベリン」と呼ばれるようになったのです。

聖母マリアと戦争が結びつけられるのはこれが初めてではなく、実は、かなり古くから、聖母と「戦争と平和」をめぐるエピソードが地球上のあちらこちらに存在しています。その一つを、本書では取り上げています。それは、おおまかにいえばスラヴという民族的なバックグラウンドをウクライナとも分かち合うバルカン地域での出来事で、かつて凄惨な民族紛争が繰り広げられた国に聖母マリアが出現し、平和を繰り返し求めたという超自然現象が、以前から伝えられているのです。

日本人にはあまり知られていないこの聖母マリアの出現については、ローマ教皇庁を巻き

込む一大論争が起こることになるのですが、その信仰を歴史と重ね合わせて模索していくと、数々の疑問が生まれてきます。

聖母出現は本当か？
キリスト教の信仰とは何か？
隣人愛と残虐行為はどう結びつくのか？
絶望の中で、人々は何に頼るのか？
救いはあるのか？
憎しみはいつか消えるのか？
犯した罪はゆるされるのか？
平和はなぜ、おびやかされるのか？
もろい平和をどうしたら守ることができるのか？
何を信じて生きればよいのか？

平和を愛し求める人にとって、本書がささやかな糧（かて）となれば幸いです。

聖母の平和と我らの戦争

目次

はじめに　3
プロローグ　9

一章　**断絶の地で**……17
旧市街の宿に泊まる　21
世界遺産の橋を渡る　27
境界線の向こう側にある教会　32
内戦跡を巡る　42
モスタルからメジュゴリエへ　54

二章　**聖母の出現**……65
救い主の母マリアを慕う　68
ルルドで、ファティマで　70
聖ヤコブ教会　77
出現の丘を登る　82

丘の上の聖母マリア　97
イエスの十字架山を登る　114
ゆるしの秘跡　125
夕暮れ時の罪の告白　128

三章　「平和の女王」と民族紛争……137

内戦中の聖母のメッセージ　141
神父の静思録　146
外国との往来　148
平和を求める聖母　151
記録されない出来事　155
神父の帰天　162
聖母は守り、祝福する　164

四章　**「聖地メジュゴリエ」論争**……177

メジュゴリエをめぐる問題点　180
教区司教 vs フランシスコ会　195
公認に至るまで　199
繰り返される調査の行方　201
教皇フランシスコとメジュゴリエ　205
類似のケース　212
躍動と魅惑　214
メジュゴリエでいちばん大切なこと　220
見つからない答えを探して　226

エピローグ　235
主要な参考資料　243

プロローグ

きっかけは、二つあった。

リオデジャネイロでオリンピックが始まり、世界の多くの人々が四年に一度のスポーツの一大イヴェントを楽しんでいた。日本でも、連日繰り広げられる各国の選手たちによる競技の数々に熱い視線がそそがれ、日本選手の健闘が伝えられるたびに国内が歓喜に沸いた。

時を同じくして、別のニュースが国際社会を駆け巡った。シリアのアレッポで容赦なく続けられていた爆撃で、再び多くの子どもたちが犠牲になった。特に注目を集めたのは、そのニュースとともに配信された子どもの写真だった。傷を負い、流血と空爆の砂塵にまみれ、座ったまま、呆然（ぼうぜん）として動かない男の子。その姿は衝撃的で、人々を動揺させた。私もそのうちの一人だった。男の子の悲痛な姿にやり場のない怒りを感じたのはもちろんのことだが、それだけではなかった。何かがおかしい。この世界はおかしくなっている……。

平和の祭典と呼ばれるスポーツの国際大会に人々が歓声を上げるのと同じ時、そんな華々しさとは無縁の土地で熾烈な武力攻撃にさらされて、生命の危機に瀕している人たちがいる。まったく別の世界が二つある。その同時性がとても異常に思えて、恐ろしかった。

これまで私は国際平和の研究と国際協力の仕事をしてきて、アジアやアフリカの途上国のフィールドで働いてきた。独裁政権下の国に住んだこともあった。だから、長引くシリア内戦に苦しむ人たちの報道を目にするたびに、この人たちのために現地におもむいて働きたいと感じていた。しかし、危険地帯ゆえ、容易には機会が得られないことを言い訳にして、平和な国で惰性に流されていた。それが、泣くことすら忘れてしまったようなアレッポの男の子の写真を見たあとは、のらりくらりと日本で過ごしていられなくなった。でも、内戦は収まるどころか激化する一方で、シリアで働く機会が生まれそうになっても、結局は延期されてしまう。そんなことが続いて無力感に襲われるだけだった。

もう一つのきっかけは、シリアの内戦とはまったく関係がない偶然の出来事だった。

私は仕事柄、海外生活を長く送ってきたのだが、今は日本をベースにしているので、語学の感覚を保つために、英語をはじめ、外国語に接する環境を作ることに日頃から努めている。外国の映画やドキュメンタリーを動画配信サービスで見るのはその一つの方法なのだが、ある配信リストの中で、ふと、一つの映画のタイトルが目に留まった。

“Mary’s Land”

その映画についてはまったく知らなかった。

メアリーズランドって、メアリーの土地？

英語ではメアリーといえば聖母マリアの意味があるけど。

聖母マリアの地？　どこ？

と、興味を覚えた。それでなんとなく見始めると、流れてきたのはスペイン語だった。英語のタイトルだったので、言語も当然、英語だろうと思ったのだが、これでは英語力維持には役に立たない。でも、どうやら聖母マリアにまつわる内容のようだったので、見ないでやめてしまうのはマリア様に失礼ではないか。そんな気がしてとりあえず見続けることにした。スペイン語話者は世界の国々に散らばっているが、どうやら本家スペイン制作のものらしい。

映画は、メジュゴリエという田舎町を訪れたカトリック信者たちの証言が集められた、楽しげなドラマ仕立てのドキュメンタリーのようなものだった。メジュゴリエは、二〇世紀が終わりに向かう頃に、聖母マリアの出現という超自然現象が起こったというわさがある土地として、カトリック関係者の間では知られている。

聖母マリアが出現されたといわれるカトリックの聖地といえば、フランスのルルドやポルトガルのファティマが有名で、ヨーロッパ旅行が好きな日本人なら、カトリック信者ではなくても聞いたことのある地名かもしれない。私はカトリック系の学校に通っていたこともあり、ルルドやファティマの話は知っている。ルルドには実際に訪れたこともあった。

しかし、メジュゴリエについてはなんとなく聞いた記憶はあっても、確かなことを覚えているわけではなかった。映画を見ていると、アメリカ大陸からメジュゴリエへと導かれた人たちが、

「自分の人生が、そこから変わった！」

などと口をそろえて証言していたので、

「あぁ、メキシコのあの聖地？　それなら、もう行ったわ」

と思った。だが、これは勘違い。

あとからよく考えれば、メキシコの聖地の名はグアダルーペだ。グアダルーペはアメリカや中南米のカトリック信者にとっては地理的に近くて行きやすいポピュラーな巡礼地で、ナレーションがスペイン語だったから、無意識にメキシコと結びついてそう思い込んでしまったのかもしれない。アメリカで暮らしていたことがある私は、だいぶ以前にその聖地を訪れて、ついでに近郊にある太陽と月のピラミッドによじ登った。

仕事を片づけながら映画にはあまり集中していなかったので、映画の終盤になってから、メジュゴリエがボスニア・ヘルツェゴヴィナにあることにようやく気づいた。

ボスニア・ヘルツェゴヴィナか……。

私は急に関心をそそられた。たまたま、この映画を見たのが八月で、夏休みシーズンだとい

うのに私には旅行の計画もなく、この年は海外にもまだ出ていなかった。かといって、シリアを脇に置くようにしてめざすべき動機を強く感じる国は特になかったのだ。でも、ボスニア・ヘルツェゴヴィナなら……。

ボスニア・ヘルツェゴヴィナという国は日本人にはあまりなじみがない。地理や歴史に詳しい人なら、ヨーロッパのバルカン半島にある旧ユーゴスラヴィア諸国の一つで、サラエヴォオリンピックが開かれた、そしてその後、内戦が起こった、というくらいのことは知っているかもしれないが、いずれにしても、日本ではあまり話題にならない国だ。

でも、サッカー好きな人たちにはわりと知られている。サッカー日本代表チーム元監督のオシムさんといえば、そのレジェンドの名を記憶している日本人は多いと思うが、オシム監督の人間性に惹かれたサッカーファンなら、監督がボスニア・ヘルツェゴヴィナ出身であり、民族紛争に人生を翻弄（ほんろう）されたことも知っているはずだ。ただ、そうしたサッカーにまつわること以外は、この国についての認知度は日本ではあまり高くない。

私にとっては、ボスニア・ヘルツェゴヴィナは「民族浄化」と「ジェノサイド」の国。そういう印象があった。一九九〇年代前半に凄絶な民族紛争が起こったボスニア・ヘルツェゴヴィナ。一つの国の中で長く平和的に共存していた多民族が対立を始めて内戦となり、約一〇万人

の死者と約二〇〇万人の難民・避難民を出したといわれている。その内戦勃発当時、私はアメリカの大学院に留学中で、その後、国際協力の仕事に就くのだが、バルカン諸国にかかわる機会はなく、ボスニア・ヘルツェゴヴィナの内戦が終結して四半世紀ほどが過ぎ、この国を思い出すことはほとんどなくなっていた。

ところが、そんな歳月を経て、私は偶然、『メアリーズランド』という映画を見て、ポスト紛争国としてのボスニア・ヘルツェゴヴィナに新たな興味を抱いたのだ。

シリア渡航が無理なら、その代わりということではないけれど、かつて瀕死の状態に追い詰められたあの国に行って、内戦で破壊され尽くした戦場の現在の姿を見てくるのもよいのではないか。

そんな想いが生まれた。

さらにもう一つ、気持ちが動いた理由があった。映画に出てくるメジュゴリエは明るい陽の光にあふれ、人々は青空の下でゆったりと祈っていた。私もあんなふうに美しい自然の中に身を置いて、心静かに祈ってみたい……。

いつのまにか、私の祈りの中に、ボスニア・ヘルツェゴヴィナがあった。

ボスニア・ヘルツェゴヴィナと周辺国

ボスニア・ヘルツェゴヴィナは北部のボスニア地方と南部のヘルツェゴヴィナ地方から成る。地図の点線は二つの地方のおおよその境界を示している。この地理的な要素に加え、ボシュニャク（ムスリム）系、クロアチア系、セルビア系という主要三民族の間に起こった内戦（1992–1995 年）の和平合意によって、国はボシュニャク系とクロアチア系住民主体のボスニア・ヘルツェゴヴィナ連邦とセルビア系住民主体のスルプスカ共和国という二つの独立統治圏に分かれたため、複雑な体制による一つの国家が形成されることとなった。

一章 断絶の地で

内戦から復興を遂げた古都
独特の風情あふれる景色が旅人を魅了する

★

サラエヴォから出るモスタル行きのバスは午前九時出発の予定だった。

バスのチケットは、クロアチアの観光バスの予約サイトで、日本からすでにオンラインで事前購入していた。まったく知らない東欧の会社のサイトでクレジットカードを使って安全なのかどうか、少し迷ったが、エイヤッと購入ボタンを押すと、見慣れたクレジット会社の認証のページに切り替わってセキュリティチェックがされるようになっていたので、とりあえず大丈夫だろう、と思うことにした。それでも、日本からプリントアウトしてきたそのチケットが本当に使えるのかという一抹の不安はあったが、追加で日本の消費税にあたる付加価値税三マルカを窓口で支払う必要があったものの、ゲート係のおじさんは問題なく通してくれた。

ゲートを通過するとバスの発着所が縦に細長く続いていて、その一番奥まで行くと、Sarajevo – Mostar と大きなサインが出ているバスが見つかった。一マルカ払ってスーツケースを預けようとすると、荷物係のおじさんが、明らかにマイナーな東洋人の旅行者の私が行き先を間違えていないか心配してくれたのだろうか。「モスタル？」と確認するように聞いた。おかげでダブルチェックできて、私は安心してそのバスに乗り込んだ。

出発五分前。けっこうギリギリだった。バスの中は暖房が効いていて暖かい。一〇月でも日中は日差しが強く、半袖姿だったが、朝晩は冷え込みが厳しい。座席はさほど埋まっていない。日本の観光バスと同じような感じで左右二列ずつ並んでいる。私は後方の席を選んだ。座り心地はまずまずだ。

ボスニア・ヘルツェゴヴィナの正式な国名は、「Bosna i Hercegovina」。そのまま訳すと「ボスニアとヘルツェゴヴィナ」となる。長い国名なので、「BiH」と略されることが多い。

ボスニアは国の北部、ヘルツェゴヴィナは南部の地方で、首都サラエヴォはボスニア地方に位置する。モスタルはヘルツェゴヴィナ地方にあり、サラエヴォに次いで人気の観光地でもある。私のような平和の研究者にとっては興味深い、ぜひ訪れてみたい土地だ。旅の起点に選んだサラエヴォからメジュゴリエへ向かう途中に位置するので、簡単に立ち寄ることができるのは幸いだった。

バスは予定どおりに出発した。モスタルまでの所要時間は二時間半。サラエヴォを出発した時には車内はガラガラだったので、これならゆっくりバスの旅が楽しめそう。と、思ったのは間違いだったことに私はすぐに気づくことになった。このバスはサラエヴォとモスタルを結ぶ観光バスだと思っていたのだが、バスターミナルを出発してから五分おきくらいに、ちょこ

ちょこと道端に停車して、そのたびに人が乗ってくる。途中から乗ってくる人たちは旅行者ではなく、ごく普通の日常の格好をした地元の人々で、新たに人が乗ってくるたびに、切符売り係のおじさんがバスの中を回って料金を回収している。どうもこのバスはサラエヴォとモスタルを結ぶ観光バスと、地域住民の足となるローカルバスという二つの役割を同時に果たしているようだ。

三〇分も走ると、道の両側は山々に囲まれた。赤みがかったオレンジ色に紅葉している木々が点々と美しい。

さらに走ると集落のようなスポットが現れて、バス停に人が待っていた。以後、バス停によっては続々と人が乗ってきて、そのうちになかなかの混み具合となった。空いていた私の隣の席にも若い女性が座った。女性は二人連れでどちらも黒っぽい布を頭にかぶっている。この国で私が初めて見るヒジャブ（ヘジャブ）姿の女性だった。横目でちらりと観察すると、年の頃とお化粧っ気のない素朴な感じから大学生なのかなと勝手に想像した。そのうち満席になって、通路で立ったまま乗っている人も出てきた。

続けてバスに揺られていると、そのうち今度は降りる人も出てきて、バスはいっときの満員状態から徐々に解放されてきた。私の隣の席のヒジャブ姿の女性も降りていった。

バスは山々の間を縫うようにさらに進んでいく。すると今度は渓谷の間に流れる幅広の川が

右手に見えてきた。川面は山の影と陽の光のはざまで濃い青から薄い青へ、さらにはエメラルドグリーンへ、刻々と色を変える。その、光と山と川の水のコントラストが目にキラキラまぶしく映る。自分の住む日本の都会の環境とはかけ離れた美しい景色に見惚れてしまう。川が見える右側の座席を選んで正解だった。

ふと、窓の外の景色が変化していくのに気づいた。山が違うのだ。サラエヴォ近くの山々は紅葉が見られたが、モスタルに近づくにつれ、白っぽい山肌が目につくようになった。サラエヴォ出発の時に入っていた暖房が、いつのまにか冷房に変わっていた。

車窓の景色を楽しみながらのバスの旅もすでに三時間。ようやくモスタルに入ったのだろうと思っていると、突然、眼の前に存在感のある山が見えてきた。私の目をとらえたのは、そのてっぺんに建っている大きな十字架。

あの十字架はなんだろう?

そう思ったところで、バスが終点のバスターミナルに到着した。

旧市街の宿に泊まる

予定よりかなり遅れての到着。今夜泊まるペンションのオーナーが迎えに来てくれることに

なっているのだが、待たせてしまって申し訳ない。そう思いながらバスを降りて、私は近くを見回した。

だが、それらしい人の姿はどこにもない。時間どおりに来ないのは、この国の人たちに共通の行動パターンなのだろうか。旅の初めに到着したサラエヴォの空港でも、迎えに来てくれるはずの宿のオーナーは来ておらず、三〇分ほど待たされた。モスタルの日差しはサラエヴォのそれより強烈で、ジリジリと暑い。

二〇分くらい待っただろうか。ようやく迎えらしい二人組がやって来た。あわてることもあせることもなく、何事もなかったように登場し、相手を待たせたという素振りもなく声をかけてくるというのはサラエヴォでも同様で、まったくデジャヴのような展開だ。

郷に入っては郷に従え。私もまた、何事もなかったように迎えの二人とにこやかに、「ハロー」と挨拶を交わし、車に乗り込んだ。

二人はまだ三〇代くらいの若い夫婦で、そろってTシャツにジーパン姿だ。サラエヴォの宿の女性オーナーもそうだったが、この女性もヒジャブをかぶっていない。途中の田舎町からバスに乗ってきた二人の女性は身につけていたが、サラエヴォやモスタルのように外国からの旅行者が多く訪れる観光地では、イスラム圏の国でよく見かけるヒジャブ姿はむしろめずらしい。